

I 部 基調講演

「武蔵国新羅郡誕生の歴史的背景について」

講師： 宮 瀧 交 二

(大東文化大学文学部教授)

武蔵国新羅郡誕生の歴史的背景について

大東文化大学 文学部 歴史文化学科 教授 宮 瀧 交 二

はじめに

高句麗・新羅はともに古代朝鮮半島に存在した大国でしたが、2016年は、『続日本紀』霊龜2(716)年5月辛卯条に、

駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七国の高麗人千七百九十九人を以て、武蔵国に遷して始めて高麗郡を置く。

と記されているように、この当時、日本の東国各地に移り住んでいた高句麗からの渡来人が集まって、武蔵国に高句麗の国名を冠する高麗郡(郡名は2文字が原則のため、高句麗を高麗と表記したと推測されます)を建郡してから、ちょうど1300年目にあたりました。日高市をはじめとする地元の自治体や、ゆかりの高麗神社等で、様々な記念行事等が催されたことは、記憶に新しいところでは、

また、同じく『続日本紀』天平寶字2(758)年8月癸亥条には、

帰化の新羅僧卅二人・尼二人・男十九人・女卅一人を武蔵国の閑地に移す。是に於て、始めて新羅郡を置く。

とあり、高麗郡に約40年遅れて、やはり武蔵国に、今度は新羅の国名を冠する新羅郡も建郡されました。今年、新羅郡が建郡されてから、1260年目にあたります。

ところで、このような事態は、現在で言えば、埼玉県内に外国の国名を冠した市町村を設置したに等しいもので、当時にあっても、極めて異例のことであったと思われます。ここでは、この武蔵国を舞台とした高麗郡と新羅郡の建郡の背景を、当時の東アジア史の中で考えてみたいと思います。

I 7世紀の朝鮮半島情勢と渡来人

まず、7世紀の朝鮮半島情勢を再確認しておきたいと思います。高句麗、新羅、百済の鼎立が

続いていた朝鮮半島でしたが、660年、唐・新羅の連合軍が百済を滅ぼしました。倭は復興を図ろうとしていた旧百済軍を支援するために出兵しましたが、663年、百済・倭の連合軍は錦江の河口付近(白村江)で唐・新羅の連合軍と戦い、大敗を喫しました。この時、百済の王族・官人の中には倭国に政治的亡命を図った者があり、この他にも数多くの百済の人々が難民となって、動乱を避けて倭に移住したとみられています。勢いついた新羅は、668年、再び唐の力を借りて今度は高句麗を滅亡させました。こうした朝鮮半島の相次ぐ動乱により、数多くの百済・高句麗の人々、そして、勝者であった新羅からも祖国を離れる決意をした人々が、数多く倭に移住したとみられています。

ところで、かつては、こうして倭に移り住んだ人々は「帰化人」と総称されていました。しかしながら、彼らの総てが自らの意志で倭に「帰化」することを望んでいたとは言えず、その中には、一時的な避難と考えていた者や、倭によって移住を余儀なくさせられた技術者などもいたとみられます。このことから、今日では、「帰化」を求めた人々も含め、海を越えて倭に渡って来た人々という意味で、「渡来人」と総称することが一般的となっています。

Ⅱ 文献史料にみる古代東国の渡来人

以上のような契機から、倭にやって来た渡来人たちは、九州や近畿地方をはじめとする西日本各地のみならず、既に7世紀代には、関東地方にも移り住んでいたことが、史料(文献史料)からも明らかです。今回のテーマとなる武蔵国に関わるものとしては、『日本書紀』の7世紀後半にあたる場所に、集中して、以下のような百済・新羅からの渡来人に関する記述を見出すことが出来ます。

①天武天皇13(684)年5月甲子条

化来る百済の僧尼及び俗、男女併せて二十三人、皆武蔵国に安置む。

②持統天皇元(687)年4月癸卯条

筑紫大宰、投化ける新羅の僧尼及び百姓の男女二十二人を献(たてまつ)る。武蔵国に居らしむ。田賦(たま)ひ稟(かて)受(たま)ひて、生業を安からしむ。

③持統天皇4(690)年2月壬申条

化帰ける新羅の韓奈末許満等十二人を以て、武蔵国に居らしむ。

まず、①②ですが、後述のように「僧尼」の存在が注目されます。また②では、「田」と「稟」の語があるように、新羅からの渡来人を武蔵国に住ませるに際して、土地と食糧を与えて優遇していたことが注目されます。また、③からは、「韓奈末許満」という人名がうかがわれ、興味深いところです。

Ⅲ 考古資料にみる東国の渡来人

また、武蔵国における渡来人の足跡は、考古資料からもうかがうことが出来ます。特に広く知られているのが、埼玉県行田市の酒巻14号墳(6世紀末)からの出土遺物で、これらは、古代朝鮮半島の色彩が強いことで広く知られています(行田市郷土博物館『海をわたってきた文化 朝鮮半島から武蔵へ』1991年)。同古墳からは、他に例を見ない高句麗の古墳(北朝鮮・舞踊塚[4世紀後半]ほか)の壁画に見られるのと同じ筒袖の衣装を着た人物の埴輪や、同じく高句麗の古墳(北朝鮮・双楹塚[5世紀]ほか)の壁画に見られる、鞍に旗竿を装着した重装騎兵が用いる重装の馬を表現した埴輪が出土しており(いずれも国の重要文化財に指定されています)、酒巻14号古墳の被葬者と渡来人の間には、密接な関係が想定されています。

Ⅳ 摂津国百濟郡の建郡

さて、古代武蔵国における高麗郡と新羅郡の建郡を考えようとする際に看過出来ないのが、摂津国百濟郡の存在です。前掲のように、660年に滅亡した百濟でしたが、『日本書紀』天智天皇3(664)年3月条には、

百濟王善光王等を以て、難波に居らしむ。

とあり、倭は亡命してきた百濟王族・貴族層を難波に配置しています。これが、大宝元(701)年の大宝令施行時には、摂津国百濟郡の建郡となって具現化していくのですが、滅亡した百濟の国名を冠した百濟郡が、天皇の居所である宮を包摂する「五畿」の一つである摂津国に置かれたこ

とは重要です。これは、倭が旧同盟国であった百済を滅亡後も重視していたことの象徴であり、荒井秀規氏の言を借りれば、「ヤマト王権内に百済王権を創出」(荒井秀規「渡来人(帰化人)の東国移配と高麗郡・新羅郡」『(専修大学)古代東ユーラシア研究センター年報』1、2015年)したとみてよいでしょう。

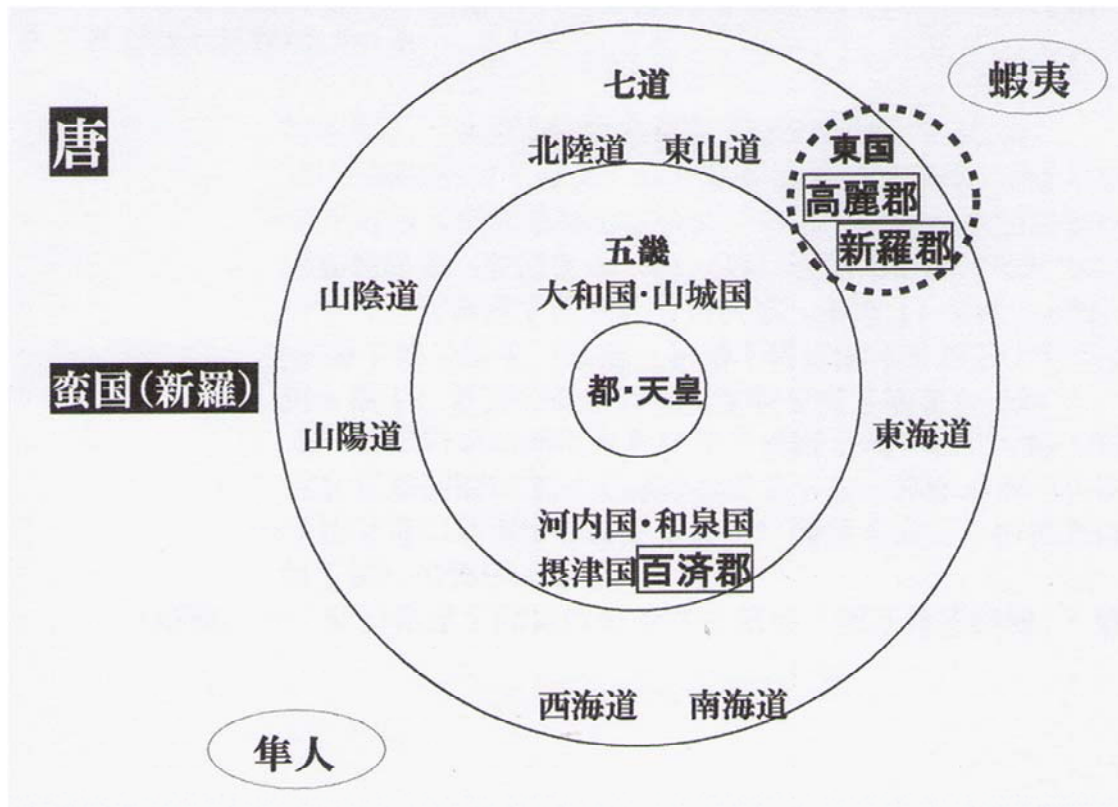
V 建郡は誰の意志で行われるのか

それでは、なぜ前掲のように、高句麗の国名を冠する高麗郡や、新羅の国名を冠する新羅郡が、この武蔵国に建郡されたのでしょうか。この点については、これまでに、①高句麗からの渡来人を隔離する必要性が生じたため、また逆に、②渡来人を優遇し日本人と融和させるため、③渡来人が有する農業・土木技術等を重視し北武蔵地域の開発を促進するため、そして、④渡来人の郡を設けることにより北武蔵地域の国家支配を強化するため、等の諸説が提出されてきました。しかしながら、いずれの説も論拠が脆弱で、未だ決着をみていないというのが実情です。

そこで私は、そもそも建郡は誰の意志で行われるのかという点に、先ず注目しました。建郡に関しては、養老律令の中の公式令が、太政官が天皇の裁決を仰ぐ場合に用いる公文書の様式として、論奏式、奏事式、便奏式の三種を定めている中で、公式令論奏式条に「廃置国郡」(国や郡の設置や撤廃)の規定があります。早川庄八氏によれば、「論奏」は、太政官が独自に発議した案件を天皇に奏上して裁可を仰ぐ案件であって(早川庄八「太政官処分について」『日本古代の社会と経済 上巻』吉川弘文館、1976年)、諸司官人から太政官に上申された案件を太政官が審議し更に天皇に奏上して裁可を仰ぐ「奏事」や、日常的な政務について太政官の審議を省いて少納言が天皇に奏上して裁可を仰ぐ「便奏」とは異なるものです。つまり、「廃置国郡」(国や郡の設置や撤廃)は、まさに国家の大事を時の政策集団である太政官が協議し発議する「論奏」の中に位置付けられていたのです。つまり、高麗郡や新羅郡の建郡は、地元の武蔵国等から太政官に上申された案件(地域からの要請された案件)ではなく、太政官が国策として独自に発議・協議する案件だったのです。

VI 武蔵国高麗郡建郡の歴史的背景

そこで浮上してくるのが、当該期の東アジア世界における国際関係の中での検討、換言するならば、日本の外交政策の中での検討です。既に多くの研究者が指摘しているように、日本の古代国家は、東アジア世界における唐に次ぐ地位を確保するために、唐に学んだ「日本型 中華思想」を構想・実践していました。新羅は「蕃国」(野蛮国)であり、また、未だ律令制度が及んでいなかった東北地方、南九州の人々は、それぞれ「蝦夷」、「隼人」という「夷狄(いてき)」に位置付けられていました。おそらく、この当時の東アジア世界にあって、唐に次ぐNO. 2の地位を得るために、日本は、この「日本型中華思想」に立ち、朝鮮半島の今は無き百済・高句麗に加えて新羅という三国を支配し従えているという権力構造を演出する必要があったのではないのでしょうか。そのためには、旧同盟国であった百済については、天皇の庇護の下で「五畿」の一つである摂津国に百



日本型中華思想の模式図

済郡を設置したのですが、同じように、高句麗および「蕃国」である新羅を「五畿」に置いてしまうと、両国を優遇している構図になってしまいます。そこで、この両国の民は本来ならば日本国内に居住出来る立場にはないのですが、天皇の徳をもって、かろうじて「蝦夷」という「夷狄」の世界に隣接する東国(坂東諸国)という「日本の辺境の地」に服属・居住させているという構図を作る必要があったのではないのでしょうか。この時、高麗郡のみならず新羅郡も同時に建郡することもあり得ましたが、日本国内に新羅郡を置くことは、より一層、国際的緊張関係を高める可能性があるかと判断され、その建郡は先送りされたものと思われます。

以上のような理由で、高麗郡は東国という辺境の地に建郡されなければならなかったのですが、それでは何故、東国諸国の中で、この武蔵国に建郡されたのでしょうか。『続日本紀』延暦8(789)年10月乙酉条が載せる高麗朝臣福信[和銅元(708)年～延暦8(789)年]の墓伝には、

其の祖の福德は唐将・李勣が平壤城を抜くに属して、国家に来帰して、武蔵に居す、福信は即ち福德の孫なり

とあり、その祖父の福德は、高句麗の滅亡に先立つ天智天皇5(666)年頃に日本に帰化して武蔵国入間評(大化5[649]年頃、従来の国造の支配領域は「評」とされた)に移り住んでいたことがうかがわれます。この天智天皇5年には、大宝3(703)年に王姓を賜る高麗王若光も来日しており、彼らがたまたま居住した武蔵国入間郡が建郡候補地となり、入間郡が分割されて高麗郡が建郡されたのではないのでしょうか。埼玉県日高市に、高麗郡建郡以来の歴史を伝える高麗神社が存在していることは、皆様も御存知のとおりです。

Ⅶ 武蔵国新羅郡建郡の歴史的背景

このように考えれば、天平寶字2(758)年の新羅郡の建郡も、ここでは詳しく述べる余裕はありませんが、天平寶字4(760)年に遣唐副使・大伴古麻呂が唐・長安の蓬莱宮・含元殿における朝賀の儀で、新羅と上席を争う(『続日本紀』)など、まさしく戦争前夜とも言うまでに緊張していた日本と新羅の外交関係を、その背景に見出すことが可能です。新羅郡の建郡も、高麗郡建郡の際と同じく、藤原仲麻呂政権下の政策として、唐に向けた「日本型中華思想」の誇示を目的としたも

のであったとみておくことが、妥当ではないでしょうか。武蔵国新羅郡の建郡は、古代東国の「地方史」ではなく、優れて日本古代の東アジア外交史上の問題であったということに他なりません。

Ⅶ 新羅琴の名人・沙良真熊

ところで、この新羅郡には、沙良真熊という新羅琴の名人がいたという記録があります。『文徳実録』嘉祥3(850)年11月己卯条には、

従四位下治部大輔卒す、(中略)、能く和琴を弾き、仍って大歌所別当為て、常に節会に供奉す、新羅人沙良真熊、善く新羅琴を弾く、書主相随って伝習し、遂に秘道を得る、(後略)

とあり、興世朝臣書主という宮中の大歌所にいた和琴の名人が、新羅人沙良真熊から新羅琴を教わったと記されています。また、『文徳実録』天安2(858)年5月乙亥条にも、

是日宮内卿高枝王薨す、(中略)、高枝沙門空海之書迹を学び、沙良真熊の琴調を習う、未だ其の一道を得ずして、遂に身終わるに至る、時に五十七、(後略)

とあり、この沙良真熊は、書の空海と並び称される琴(新羅琴)の名人であったことがわかります。沙良真熊については、この2つの史料に遡ること70余年前の、『続日本紀』宝亀11(780)年5月甲戌条に

武蔵国新羅郡人沙羅真熊等二人に広岡造の姓を賜う

とも記されていて、武蔵国新羅郡に居住していたことがわかります。ここで真熊が「広岡」の姓を賜っていることは重要です。すなわち、平安時代・承平年間(931~938)に成立した百科辞書である『和名類聚抄』が載せる武蔵国豊島郡の郷名の中に「広岡郷」がありますので、おそらく沙羅真熊等は、新羅郡が建郡されるまでは武蔵国豊島郡広岡郷に居住していて、天平寶字2(758)年にその一帯が豊島郡から分割されて新たに新羅郡となったので、この時、懐かしい豊島郡広岡郷の地名を姓にしたいと願い出たと考えられます。武蔵国高麗郡が入間郡を分割して誕生したように、武蔵国新羅郡は豊島郡を分割して誕生したことが、この記事からうかがえます。

一方で新たな疑問も生じます。もし仮に、天平寶字2(758)年に沙羅真熊が武蔵国新羅郡に居住

していたとすれば、その22年後のこの宝亀11(780)年の時点で、既にかかなりの年齢に達していたと考えられます。仮に新羅郡建郡時に20歳だとしても40歳過ぎでしょうか。そして、先に掲げた興世朝臣書主と高枝王が亡くなったのが、それぞれ嘉祥3(850)年と天安2(858)年ですので、2人が沙羅真熊に新羅琴を習ったのが果たして生前の何時のことであるかは判然としないものの、高枝王の誕生が802年頃と推定されますので、高枝王が10歳から沙羅真熊に新羅琴を習ったとしても、その時、沙羅真熊は、70余歳になります。今後は、沙羅真熊が新羅郡建郡後に誕生した人物であった可能性、また、興世朝臣書主と高枝王が新羅琴を教わった沙羅真熊は、初代・沙羅真熊から一子相伝で「秘道」を継承していた2代目・沙羅真熊であった可能性等を検討していく必要があります。

IX 和光市新倉牛房(王)山の「新羅王居跡」伝説

さて、今回のシンポジウムは和光市で開催されていますが、和光市には大変興味深い伝説が遺されています。江戸幕府の命を承けて文政11(1828)年に成立した地誌である『新編武蔵風土記稿』巻之百三十三・新座郡之五に収められている上新倉村の項にある、次のような記述です。

古蹟 新羅王居跡 牛房山の上にわづかの平地あり、昔し新羅の王子京より下向の頃、こゝに居住せしと云、【和名鈔】に載する当郡の郷名志木と云へるは、此辺のことにて志楽木の中略なるべしと、此村にすめる好事の者いへり、当村に山田・上原・大熊など氏とせる農民あり、是は旧き家なるよし、彼等が祖先は京都より新羅王に従ひ来りしなりと云伝ふ、されば此山の名も元此王子居跡より起りたる事なれば、御房山などとかくべきを、いつの頃よりか牛房の字にかへしならんと、是も村老の説なり、(後略)

残念ながら、これまでに実施された牛房(王)山の発掘調査では、こうした伝説を裏付けるような古代の遺構・遺物は発見されていません。しかしながら、民俗学者・柳田国男が、

伝説の昔話と同じでない要点としては、第一にそれが我々のいう言語芸術でなく、実質の記憶であったことを挙げなければならぬようである(柳田国男『口承文芸史考』中央公論社、1947年)

と述べているように、具体的な年月日、場所、人名等が不明な「昔話」からの歴史研究は困難である一方で、具体的な年月日、場所、人名を伝える「伝説」は、必ずその中に歴史的事実(史実)を伝えていると思われ、歴史研究の対象となり得るものです。今後は、従来、歴史学の分野からは等閑視されてきた、この和光市新倉牛房(王)山の「新羅王居跡」伝説を、今一度丹念に検討し、その伝説の中から歴史的事実(史実)を抽出する作業にも力を注いでいくことが重要だと考えます。

まとめにかえて

最後になりますが、古代新羅郡研究の意義を考えてみたいと思います。『続日本紀』天平寶字2(758)年の新羅郡の建郡記事はもとより、前掲の百済・新羅からの渡来人に関する『日本書紀』の記事の①②からも明らかなように、渡来人の中に僧尼が多数存在していたことは見逃せません。「同じ仏教徒である」という信頼感こそ、この当時、急速に仏教が浸透していた日本の地域社会に、彼ら渡来人が円滑に融合していった理由の一つではないかと思われ(鈴木靖民國學院大学名誉教授の御教示による)。同じアジアにあって、長い交流の歴史を持つ中国や北朝鮮、韓国の人々に対するバッシングやヘイトスピーチが現象する昨今ですが、かつて朝鮮半島諸国から来た渡来人を、地域社会の中にしっかりと受容していった先人の度量を、私たちが学ぶ必要があるように思います。古代史研究は、単なる「浪漫」の追求ではありません。古代の人々の足跡を解明することから、今を生きる私たちが学ぶことも多いのではないのでしょうか。

今回のシンポジウムを基点として、また、新たな古代新羅郡の研究が始まります。今後とも、和光・朝霞・志木・新座市の4市が共同して、この地域の古代史像が解明されていくことを祈念して、まとめにかえさせていただきます。